

夫婦パスタ日記

第6話『梅くらげとツナの冷製薬味パスタ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

立花 かおり（34） 印刷会社『京町印刷』総務部社員
立花 圭吾（33） 印刷会社『京町印刷』営業部社員

寺川 千晴（25） スーパー『ユーミー』レジ担当
大浦 早苗（57） かおりの母、大阪在住
立花 美里（61） 圭吾の母、元教師

かおりの後輩社員

印刷会社『京町印刷』の社員たち

気象予報士

母親

その娘

1 印刷会社『（株）京町印刷』・全景

雨が降っている――。

2 同・総務部

複合機の前に立っているかおり――複合機から印刷された書類が出てくると、それを手にして、

かおり「ああ、まただ……」

と、後輩社員が通りかかる。

後輩「何かあったんですか？」

かおり、書類を見せる――文字がかすれている。

かおり「見てよ、これ」

後輩「あれ、インク切れですか？」

かおり「トナーね」

後輩「あ、そうでした」

かおり「この間梅雨入りしたでしょ？ この時期はね、湿気のせいでトナーの付着が悪くなつて、印刷物がこんなカスカスになることが多い」

後輩「そんなことあるんですか？　でも、それじゃ印刷全然できないですよね」

かおり「面倒だけど、こういう時はね、紙を空気に触れさせないように包んでおくしかないの。それで、印刷する時だけ必要な分だけ紙を取り出す」

後輩「勉強になります」

3 同・製造部

数多くの印刷機械が、音を立てて次々と印刷物を印刷している――機械の前に立っている社員たち。

かおり（N）「私が勤める『京町印刷』は、その名の通り印刷会社だけに、常に製造部では大きな印刷機が何機も稼働している。それは発注元が数多く存在していることであり、つまりは私たち総務部会計課が発行する請求書の数が多いことも表している」

4 同・総務部

請求書の封筒入れ作業をするかおり。

かおり（N）「社内だけの書類ならば多少印字がかすれていても問題ないが、発注先に送付する請求書となれば、しっかり印字されたものにしなければならない。企業においてもIT化が進む昨今で、請求書の電子発行を取り入れている企業もある中、発注先の中には未だに紙の請求書発行、つまりアナログ対応をしなければいけない企業が何十社とあった。会計課にとっては請求書を印刷して社印を押印し、封筒に入れて宛先シールと切手を貼り、郵送するという一連の作業が大きな負担となっていた」

かおり、頭を抱えるようにして溜め息をつく。

かおり（N）「また気圧の影響で、この頃私は、軽い体調不良が続いていた」

タイトル——夫婦パスタ日記

第6 話『梅くらげとツナの冷製薬味

パスタ』

5 印刷会社『（株）京町印刷』・廊下

昼休み。

かおりが、コンビニ弁当の入った袋を
持って歩いている——と、スマホに着
信があり、ポケットから取り出す。

画面には『お母さん』の文字。

かおり、険しい顔になるが、出て、

かおり「もしもし」

6 大阪・『みどり皮フ科クリニック』・全

景

皮膚科専門の小さなクリニック。

早苗の声「ちょうど昼休みや思うて、電話し

たわ」

かおりの声「何の用？」

7 同・同・受付

受付のデスクに座って電話をしている

早苗。

早苗「そんな風に言わんかて、お母ちゃんが
何言おうとしとるか分かってるやろ。あんな、全然電話してけえへんから、どないな
つとるや思うて」

8 印刷会社『（株）京町印刷』・廊下

電話をしているかおり。

かおり「子どものことは大丈夫や。ちゃんと
圭吾君と相談して、上手くやってくわ」

早苗の声「あんた、ようやく子ども作る気にな
ったんか？」

かおり「圭吾君に言われたんや。後になって
後悔するぐらいなら今の方がええって」

9 大阪・『みどり皮フ科クリニック』・受付

電話をしている早苗。

早苗「じゃあもう心配いらへん。お父ちゃん
も喜ぶわ。ほな、切るで」

と、電話を切る。

10 印刷会社『（株）京町印刷』・廊下

電話をポケットにしまうかおり。

かおり「（苦笑して）単純やな、相変わらず

……」

11 同・講堂

かおりが入ってくる――社員たちがそれぞれ昼食を食べている。

かおり、周囲を見渡す。

12 アパート・立花家・玄関（回想）

出かける支度をしているかおりと圭吾。

かおり「今日は、外回り？」

圭吾「ああ。多分一日いかな。打ち合わせと営業で、いろいろハシゴしなきゃいけないくてさ」

かおり「今日は大変そうだね」

圭吾「まあ、営業ってのはそんなもんだ」

13 印刷会社『(株)京町印刷』・講堂(回想戻り)

かおり、空いている席に座る。

かおり(M)「そっか。圭吾君、いないんだ」

14 コンビニ・駐車場

『京町印刷』の社用車が駐車されている――自動ドアが開き、買い物を終えた圭吾が運転席に乗り込む。

圭吾、袋から冷やし中華を取り出して、食べ始める。

圭吾(N)「かおりちゃんから子どものことを相談されてから数ヶ月、特にこれといって大きな進展がないままだが、お互い今とはにかく仕事に専念しようと話し合い、変に子どものことを意識しないようにしていた」

圭吾、コンビニから出てきた、二歳ぐらいの娘とその母親と思われる女性に

目が行く。

圭吾（M）「かおりちゃんも、あんな風になるんだろうか……俺も、いずれ親という立場になるんだろうな」

圭吾、食べ終わったゴミを袋の中に片付ける。

圭吾（N）「大阪に住むかおりちゃんのお母さんは、子どもの存在について分かりやすく急かしてきたが、こっちの地元に住む俺の両親だって、口では言わないが、孫のことを気にかけていることは察しがついていた。もし親に何か言われたら、『こればかりはタイミングの問題だ』と答えようと俺は決めていた」

圭吾、社用車のエンジンをかけて出発していく。

15 スーパー『ユーマー』・全景

16 同・店内

青果コーナーの前を歩いている圭吾――
ふと立ち止まる。

反対から、買い物カートを引いた母・

美里（61）がやってくる。

圭吾「おふくろ」

美里「あら、圭吾じゃない」

圭吾「いつも買い物、ここなのか？」

美里「そうじゃないの。ここはお米が安いからね、最近になって来るようになってね。

あんたこそどうしたのよ？」

圭吾「仕事の打ち合わせだよ。今終わったんだけどさ。ここのチラシ、うちの会社が請け負ってるんだよ」

美里「へえ、そうだったの。ここはお野菜も安いし、圭吾が仕事でお世話になってるところなら、今度からこっちで買い物しようかしら」

圭吾「こっちまで来なくても、うちの周りにいくらでもスーパーあるだろ」

美里「少しでも安いほうが良いでしょ。家計

っていうのはね、上手くやりくりしていく
もんなのよ。私はずっとそれで教師と主婦
をやってきたんだから」

圭吾「この春から、再任用で違う高校に移っ
たんだっけ？」

美里「そうよ。体育教師の空きができた学校
があつてね。週三回、非常勤ってことで」

圭吾「そっか」

美里「かおりさん、元気？」

圭吾「ああ……あのさ、おふくろ」

美里「何？」

圭吾「俺とかおりちゃんの子どものことなん
だけど……」

美里「（遮って）急ぐことはないわよ」

圭吾「え？」

美里「子どもっていうのは、授かりものだか
らね。周りがどんなに急かしたところでで
きないものはできないし、逆に思いがけな
い時にできることもある。これはタイミン
グの問題よ。母さんだって、二人目が全然

できないなあと思って何年も悩んで、お姉ちゃんを産んで五年経ってから、ようやくあんたができたんだもの」

圭吾（N）「おふくろもタイミングの問題という考えを持っていたことに、俺は驚いた」

美里「そりゃあね、高齢出産のリスクだってあるだろうけど、まあ変に身構えることないわよ」

圭吾「おふくろ……」

圭吾「ほら、あんたもまだこれから仕事があるんでしょ。じゃあね、かおりさんにもよろしく」

と、カートを引いて去っていく——圭吾、振り向いて母の姿を見送る。

圭吾（M）「ありがとう、おふくろ」

17 アパート・全景

18 同・立花家・玄関く居間

圭吾が靴を履いて出かけていく。

圭吾「じゃ、行ってきます」

台所で洗い物をしているかおり、それへ、

かおり「行っただけ」

かおり（N）「今日は土曜で、圭吾君は休日出勤のために出かけていった。一人になった私は、買い物などで終日外出をし、圭吾君が帰ってくるタイミングで家に帰る予定にしていた」

19 街

かおりが歩いている――通っていく中華料理店の前に、『冷やし中華始めました』と書かれたのぼりが立っている。

かおり（N）「幼少期、冷やし中華を食べ始めるのは大体七月に入った頃だったが、今では六月から冷やし中華が美味しく感じるようになった。そもそも大阪で生まれ育った私には、『冷やし中華』という言葉は馴染みがなかった。大阪では『冷麺』と呼ぶ

のが一般的であり、私の家でも皆が『冷やし中華』ではなく、『冷麺』と呼んでいた」

20 イメージ映像

『冷やし中華』と『冷麺』の比較。

かおり（N）「錦糸卵やきゅうり、ハムといった定番の具材だけでなく、中華くらげや蒸し鶏、トマトなど、大阪で自分がこれまで食べてきた『冷麺』は具材が山盛りという特徴があった。そのため、上京して初めて大学の食堂で『冷やし中華』を見た時、私は物足りなさを感じていた」

21 大阪・大浦家・台所（回想）

かおり（N）「せっかちな私の母は、何日かに一度のペースで『冷麺』の支度をすることが嫌になることがあった」

早苗が冷麺の支度をしている——早苗、カメラ目線（かおりの視点で）。

早苗「錦糸卵作って、きゅうりとハム細切り

にして、トマト切って、いろいろせなあかんやろ。作る方は大変なんやで」

22 同場所（同）

早苗が、『梅くらげとツナの冷製薬味パスタ』の支度をしている。

かおり（N）「そんな母が、簡単にできるからと、我が家で作ってくれたのが『梅くらげとツナの冷製薬味パスタ』だった」

早苗、カメラ目線（かおりの視点で）。

早苗「包丁使わんかてできるパスタやろ。」

『冷麺』よりこっちのほうがええわ。材料もそんなに高くないしな」

かおり（N）「調理といえば、パスタを茹でて氷水で締めるぐらいで、後は具材や薬味を上に乗せ、特製ドレッシングをかけるだけという簡単レシピだった」

23 街（回想戻り）

かおりが歩いている。

かおり（N）「こういう時期だからこそ美味しいだろうと、私は今晚、母が作ってくれたパスタを作ってみようと思った。幼少期から何度も母が作ってくれて、自分も上京後に一人で作ったことや、圭吾との結婚後に何度も作ったことがあるので、レシピは頭の中に入っている」

24 スーパー『ユミー』・店内

買い物カートを引いて、カゴに食材を入れていくかおり。

かおり（N）「刻み海苔とツナの缶詰が台所にあつたことは覚えていたので、私は『ユミー』に立ち寄って、残りの材料を買いことにした」

×	×	×
商品のレジ打ちをしている千晴――傍らにかおり。		

かおり「あ、ポイントカード出し忘れてた。（と財布からカードを取り出す）」

千晴「カードお預かりしますね。（とレジ操作をすると）五番の精算機でお願いします」と、買い物カゴを精算機の前に移動させる――かおり、精算機のタッチパネル操作を行い、会計を済ませる。

25 同・表

雨が降っている。
エコバッグを持ったかおりが出てくる――鞆の中から、折りたたみ傘を取り出して広げ、歩いていく。

26 アパート・立花家・居間（夕）

かおりが帰宅する――エコバックをテーブルに置くと、ソファ―に深く座り込む。

かおり、スマホを取り出して、圭吾にメッセージを送る。

かおりのメッセージ&声「今日は、冷製パスタ作るね」

と、テレビをつけると、夕方のニュース番組が放映されている。しばらく見ていると、スマホに通知が来る――圭

吾からメッセージが届いている。

圭吾のメッセージ&声「了解！ 今から帰ります」

かおり（M）「圭吾君が帰って来るまで、まだちょっと休めるな……」

と、テレビのほうへ意識を向けると、気象予報士が話している。

× × ×

インサート・テレビ画面。

気象予報士「例年以上に梅雨明けには時間がかかりそうです。おそらく、まだ一ヶ月近く先と思われます」

× × ×

かおり、窓のほうを見る――外から小雨の降る静かな音が聞こえている。

雨が降っている。

28 同・立花家・居間

かおりが、ソファーから立ち上がり、
台所へ向かう。

かおり（M）「さて、そろそろ作ろうかな」

と、刻み海苔とツナの缶詰を手にする。

かおり、ごま油とオリーブオイルの容
器を見つめる。

かおり（M）「ごま油とオリーブオイルもあ
る。確か、冷蔵庫に麵つゆも……」

と、冷蔵庫の冷蔵室を開けて、全体を
見渡す。

かおり（M）「あれ……麵つゆ切らしてるじ
ゃん」

と、慌ててスマホを手にして、圭吾に
メッセージを送る。

かおりのメッセージ&声「ごめん、帰りに麵
つゆ買ってきて」

と、すぐに既読がつき、圭吾からスタ

ンプの返信が来る。

圭吾の声「OK！」

かおり「（呟いて）ゆっくりやるか……」

× × ×

以下、調理工程をカットバックで。

かおり、コンロの上に鍋を置き、水と塩を入れる。

かおり（M）「鍋に水二リットルと塩小さじ四杯を入れて沸騰させる」

× × ×

鍋の水が沸騰している——かおり、 pasta を鍋の中に入れる。

かおり（M）「水が沸騰したら、pasta 二 hundred grams を入れて茹でていく。pasta のパッケージには、『茹で時間九分』と書いてあったが、冷製 pasta として水で締めるため、茹で時間よりプラス二分茹でる。この茹で時間は、母から教わった」

× × ×

かおり、ツナの缶詰のふたを半分ほど

開けて、油を切る。

かおり（M）「ツナ缶は、中の油を切る。ちなみに、二人分で一缶使う分量で、これは母曰く……」

と、早苗の声が蘇る。

早苗の声「一気に何缶も消費するのはもったいないやろ」

29 イメージ映像

冷麺——その中に入っている蒸し鶏。

かおり（N）「大阪で食べていた頃の『冷麺』には蒸し鶏を入れるものもあったので、おそらくそれがヒントになって、ツナを入れているのだろうと私はずっと思っている。母も今私が作っているパスタのレシピは、親から教えてもらったもので、少なくとも祖母、母、私と三世代に受け継がれている。だが、それより上のことは、私にも分からず、このパスタのルーツは不明である」

30 アパート・立花家・居間

かおり、パスタが茹で上がるのを待っている。

かおり（M）「本来ならパスタを茹でている間にドレッシングを作るのだが、麺つゆを切らしているので、私はただじっと、パスタが茹で終わるのを待っていた」

× × ×

冷蔵庫についている磁石付きのタイマーが鳴る。

かおり、コンロの火を止め、トングでザルに入れる。

かおり（M）「茹で上がったパスタは、まずザルに入れる」

× × ×

かおり、そのザルを、氷と水を入れた大きなボウルの中に入れて浸からせる。

かおり（M）「そして、氷水の中に入れてパスタの麺を締める」

× × ×

かおり、白い皿二枚に、それぞれパスタを盛り付ける。

かおり（M）「パスタを、皿にそれぞれ盛り付ける。この上から具材を散らしていく」

× × ×

かおり、袋から塩昆布をふたつまみして、一枚目の皿に乗せ、同じ工程を二枚目にも行う。

かおり（M）「塩昆布は、ふたつまみ程度、それぞれの皿に散らす」

× × ×

かおり、袋から刻み海苔をつまんで、一枚目の皿に乗せ、同じ工程を二枚目にも行う。

かおり（M）「刻み海苔も同じ要領で、適量をそれぞれの皿に散らす」

× × ×

かおり、パックの刻みねぎをつまんで、一枚目の皿に乗せ、同じ工程を二枚目にも行う。

かおり（M）「同じ要領で、刻みねぎも」

× × ×

かおり、大葉を二枚ずつ、葉の部分を
手でちぎって、それぞれの皿に散らす。

かおり（M）「大葉は茎を切って、二枚ずつ
それぞれ葉っぱの部分を手でちぎって、皿
に散らす」

× × ×

かおり、ラップをはがして、パックの
ちりめんじゃこを掴むと、上からそれ
ぞれの皿に散らす。

かおり（M）「ちりめんじゃこを、それぞれ
散らす。パックには五十グラムと表記され
ていたので、一人分で約二十五グラム」

× × ×

かおり、バターナイフで缶のツナを皿
に盛り付ける。

かおり（M）「さっき油を抜いたツナの缶詰
は半分ずつ、パスタの中央に添える」

× × ×

かおり、梅くらげのパックを、バターナイフですくってツナの上に重ねるように添える。

かおり（M）「梅くらげも同じように、適量をツナの上に重ねるようにして添える。後は、ここにドレッシングをかければパスタの完成……なのだが、まだドレッシングが作れないので、一旦待機」

31 同・全景（夜）

かおり（N）「それから、約十分後」

32 同・立花家・居間

圭吾が帰宅する――ソファ―に座っているかおり。

かおり「おかえり」

圭吾「ただいま。麺つゆ買ってきたよ（と鞆の中から麺つゆの容器を取り出す）」

かおり「ありがとう」

圭吾「風呂沸かしてくる」

かおり「お願い。これでドレッシング作った
ら、すぐできるから」

と、出ていく圭吾。

かおり、麵つゆの容器を持ったまま台
所に立つ——小さめの器に、麵つゆ、
オリーブオイル、ごま油を、計量スプ
ーンを使って入れ、混ぜ合わせる。

かおり（M）「ドレッシングの作り方は簡単。
小さめの器に、麵つゆ大さじ四杯、オリ
ブオイル大さじ二杯、ごま油大さじ二杯を
入れて、混ぜ合わせる。これでドレッシン
グは完成」

× × ×
かおり、できあがっていたパスタに、
ドレッシングをかける。

かおり（M）「ドレッシングをパスタの上か
らかける。これで、少なくとも私の家に三
代に渡って伝わる『梅くらげとツナの冷製
薬味パスタ』の完成」

33 完成した『梅くらげとツナの冷製薬味パスタ』

34 アパート・立花家・居間（夜）

かおりが、テーブルにパスタを運んでくる――圭吾が戻ってくる。

かおり「おまたせ、できたよ」

圭吾「お、もうこの冷製パスタの時期になったか」

かおり「何回作ってもやっぱり簡単なレシピなの。せっかちな母さんが冷麺以上に作りがかる気持ち、今になってよく分かる」

圭吾「そっか」

かおり「今日出かけた時もさ、中華料理屋さんとかラーメン屋さんに、『冷やし中華始めました』って、のぼりが立ってた」

圭吾「今年も暑くなるんだろうね」

と、かおりと圭吾、テーブルに向かい合うように座る。

かおり・圭吾「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

圭吾「冷やし中華も良いけど、かおりちゃんが作るこの冷製パスタ食べると、もう夏が来たって感じがするなあ」

かおり、圭吾の顔を見つめる。

圭吾「どうした？」

かおり「ううん。美味しそうに食べてくれる相手がいると、良いなあと思ってさ」

圭吾「どうしたんだよ、急に改まっちゃって」
かおり「別に」

圭吾「ふーん」

かおり「あのさ、圭吾君」

圭吾「何？」

かおり「今日買い物に行ったんだけど、その前、午前中に病院行ってきたんだ」

圭吾「病院……？」

かおり、バッグの中から手帳を取り出した――表紙には、ピンク色の文字で『母子手帳』と書かれ、母親と赤ん坊の水彩画のイラストが載っている。

圭吾「母子手帳って、まさか……」

かおり「産婦人科に行ったら、十週目に入ってたって」

圭吾「本当ッ……！？（と勢いよく立ち上がる）」

かおり「うん。私はママになって、圭吾君はパパになる」

圭吾「（拳を高らかに上げて）やったー！」
かおり「この味、生まれてくるこの子にも、
いずれちゃんと継いであげなくちゃね」

と、自分の腹部に、かおりは優しく手を当てる。

圭吾「名前、考えないとな」

かおり「まだ性別も分かってないのに」

圭吾「あ……そうか」

かおり「圭吾君までせっかちにならないでよ」

圭吾「ごめん。嬉しくて、つい。でもさ、これから仕事は無理しない程度にしないとね。
もう、かおりちゃん一人の体じゃないんだから」

かおり「分かってる。けど、せっかくだから産休ギリギリまでは仕事しようかな。出産したら、いつ復帰できるか分からないし」

圭吾「俺も育休取ろうかな」

かおり「え？」

圭吾「だって、生まれてくる子どもは、二人の子どもなんだから。俺だって、ちゃんと育てたいし」

かおり「こういう時、同じ職場だと便利だね。二人で予定合わせて、交代で産休と育休取れば良いんだから」

笑い合っているかおりと圭吾。

かおり（N）「『京町印刷』が、経済産業省が創設した『健康経営優良法人認定制度』として認定されていることを、総務部勤務の私は把握していた。先輩社員の中には、産休や育休を取得し、ワークライフバランスを取った者もいる。私は、自分もそんなのだろうと、頭の中でイメージしていた」

35 同場所（数日後）

かおりと圭吾が、それぞれスマホで電話をしている。

かおり（N）「しばらくして、私たちはそれぞれの母に妊娠の件を伝えた。圭吾君のお母さんはホッとして穏やかに喜んでくれ、大阪の私の母ときたら、紙おむつや粉ミルクのメーカーや子ども服のブランドでオススメなところを次々に伝え、通販サイトで『おむつケーキ』やスプーンやフォークなどを一式揃えた『プレートセット』をもう発注しようと考えているほどの始末だ。生まれる前からこんなに有頂天になっている母親に対して先が思いやられると考えながらも、まずは親孝行ができたのかもしれないと、私は思っていた」

つづく